

「社会科観」を育成する教育系大学・学部の授業

—「初等社会科内容論」の実践を通して—

紙田 路子

(岡山理科大学教育学部初等教育学科)

(2019年10月21日受付 2020年3月13日受理)

1. はじめに

平成28年8月の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（中央教育審議会答申）」⁽¹⁾では、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために共有すべき授業改善の視点として以下の点が示された。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ② 子ども同士の協働、教職員や地域の人々との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③ 各教科で習得した概念や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせ、問いを見出し解決したり、自己の考え方を形成し表したり、思いを基に構想、創造することに向かう「深い学び」が実現できているか。

①②は「教科等を横断する汎用的なスキル等に関わるもの」、③は「教科の本質に関わるもの」ととらえることができる。特に③について中教審では、『見方・考え方』には教科ごとの特質があり、各教科を学ぶ本質

的な意義の中核を担うものとして、教科等の教育と社会をつなぐものである⁽²⁾とし、「教科の本質」と「社会とのつながり」を強調している。例えば、社会科における「教科の本質」と「社会とのつながり」とは、「民主社会の担い手たる資質・能力の育成」という社会科の目的によって関連付けることができる。すなわち、「社会に生きる市民としての自己の人生を、豊かな意義あるものにするための知識や技能、態度の育成」という社会科の目標が、実際の「社会とのつながり」の文脈での「教科の本質」の解釈を促すのである。

教育学部における教員養成においてはこのような「教科の本質」と「社会のつながり」について深く理解し、それを実践できるスキルを身に付けさせていく必要がある。それらが教師のゲートキーピング⁽³⁾の基盤となる。

教師のゲートキーピングとは、公的なカリキュラムをそのまま実行するのではなく、修正・調整の上で、教師が自らの実践カリキュラムを構築していく営みを指す。教師のゲートキーピングの要因として、日本の社会科教育研究では、教師の置かれている「環境・文化」説、教師が習得している「専門的能力」説、教科指導の「思想・教育観」説が提唱されてきた。草原らは、同じ公民学習教材を渡された4人の教師のカリキュラムデザインを比較し、そこに「環境・文化」や「教科観・教育観」がいかに関与して、類似化と差異化をもたらしているかを調査した⁽⁴⁾。

その結果、4人の教師は教員養成課程で確立した教科の「思想・教育観」を、それぞれが置かれた「環境・文化」によって実践、変容させていることが明らかとなった。以上の先行研究から、ゲートキーピングを行うには、教員養成の段階で、教科の「思想・教育観」を身に付けなければならないことが分かる。

教科の「思想・教科観」とは、「何のためにその内容を教えるのか」「その教科はなぜ必要なのか」という、教科の目標についての見方や考え方である。草原らは、このような教師が志向する教科指導の思想・信念を、「思想・教科観」ととらえている⁽⁶⁾。しかしながら、これまでの教員養成課程においては、このような「教科観」の育成を目的とした実践は必ずしも行われてこなかった。

「本来的に教職専門性の形成における大学が果たす役割やその可能性は少なくないのに、これまで大学はその役目を十分に果たしてこなかった」とする考え方のもと多くの教育系大学、学部では教員養成プログラムの見直しを行っている。その一つが大学の講義環境の「学校現場化・臨床化」とも言える動きである。従来行われてきた教育実習に加え、現場観察やインターン、あるいは教育ボランティア等、学生を教育実践の場に触れる機会を増やす、あるいは模擬授業等、実際の授業を想定した講義を行う等があげられる。もうひとつは、教職コースの教科専門内容の講義内容を、学習指導要領に準拠したもの、または教科書の内容を意識したものに組み替えることである⁽⁷⁾。

誤解を恐れず言えば、この2つの取組は「学習指導要領の目標と内容を、具体的実践的に履行できる教員を育てる」ということではあるまいか。そこには「そもそも何のためにその教科を教えるのか」「なぜ教育にその教科が必要か」という「ねらいをめぐる議論 (aim talk)」が欠けている。教科のね

らいが欠如したままでは、「教科の本質」と「社会とのつながり」を志向する社会科教育の実践は難しくなる。

岡山理科大学教育学部初等教育学科のカリキュラムでは、小学校教育課程の各教科について「内容論」と「教育法」の履修が義務付けられている。「内容論」は、各教科の目標と内容、つまり各教科の「教科観」を、「教育法」は「指導観」を身に付けることを目標としている。「教える」側の教師自身が、「なぜその教科を教えなくてはならないのか」「教科の本質とは何か」について実感を伴って理解できていなければ、教科と現実社会とのつながりを理解する授業を子どもに保障することは難しい。すなわち「社会に生きる市民としての自己の人生を、豊かな意義あるものにするための知識や技能、態度の育成」という社会科の目標を達成できなくなる。そのため、社会科において、まず1年次では、「社会科とは何か」「社会科はなぜ必要なのか」「社会科の意義とは何か」という「社会科観」を育成する初等社会科内容論を開講している。

本研究では、初等社会科内容論の実践分析を通して、学生の「社会科観」の変容について分析・検討し、社会科観を育成する講義について明らかにするものである。

2. 大学生の「社会科観」の実際

社会科は、前述したように「民主主義の担い手たる資質・能力」を育成するための教科である。中央教育審議会答申では「主権者として求められる資質・能力について」以下のように示している⁽⁸⁾。

○18歳選挙年齢の引き下げに伴い、小・中学校からの体系的な主権者教育の充実が求められている。

【資料1 社会科についてのアンケート（第1回講義時）①】

○実施：2019年4月11日（水）

○アンケート対象者：初等教育学科1年生

○アンケート回答者：78名（男59名，女19名）

○有効回答：72名

1. 社会科は好きか嫌いか。

好き	嫌い	どちらでもない
25名	7名	40名

2. 【「好き」の理由（一部抜粋）の分析】

「好き」「嫌い・どちらでもない」の理由	①「多面的・多角的に考察し、公正に判断する力」	②「合意を形成する力」	③「国家・社会の形成に主体的に参画しようとする力」
1. 教えてくれた先生の授業が分かりやすくて楽しかった。	△	×	×
2. 地図を見るのが好き。道を調べたりするのが好き。歴史が好き。	△	×	×
3. 生活している中で触れる機会が多いから	×	×	△
4. いい点数が取れたから。	△	×	×
5. ゲームの裏設定として歴史があるので調べるのが楽しい。	△	×	×
6. 勉強することで今の社会が見えてくるから。	△	×	△
7. 都道府県パズルとかたくさん知識を得ることができる。	△	×	△
8. 歴史は内容がストーリーになっており、学んでいて楽しいから。	△	×	×
9. 世界の国の文化を知るのが楽しかったから。	△	×	×
10. 地理を知っておくと歴史や国語の分野で背景を把握しやすいから。	△	×	△
11. ニュースなど、今起きていることに着目することで、知らないことを知ったり、新しい見方ができたりして関心が生まれるから。	○	×	△

【「嫌い・どちらでもない」の理由の分析】

1. 熱中するほどこの教科を勉強したいとは思わないし、すぐ勉強するのが嫌とも思わないから。	×	×	×
2. テストになると覚えることが多すぎる。	○	×	×
3. 学んだことが日常生活で役に立ったことがない。	×	×	○
4. 勉強が難しいわけでもなく簡単なわけでもなく今まで社会科について考えたことがないから。	×	×	○
5. 勉強しても覚えるだけでつまらなかった。	×	×	○
6. 社会科は情報量が多い。	○	×	×

- 政治に関わる主体として適切な判断を行うことができるようになることが求められている。
- 事実をもとに多面的・多角的に考察し、協働的に追究し根拠を持って主張するなどして合意を形成する力、よりよい社会の実現を視野に国家・社会の形成に主体的に参画しようとする力が必要である。
- 小学校段階においては地域の身近な課題を理解し、その解決に向けて自分なりに考えることなど、現実の社会的事象を取り扱っていくことが重要である。

小学校教員を目指し、初等教育学科に入学した学生は、小・中・高等学校の12年間の教育を通して、上記のような「主権者としての資質・能力」の獲得を目的とした社会科授業を受けてきたのか、明らかにするために初等社会科内容論の第1回目の講義の際にアンケートを実施した。その結果を示したものが資料1である。主権者として求められる資質能力、①「多面的・多角的に考察し、公正に判断する力」、②「課題の解決に向けて、協働的に追究し根拠を持って主張するなどして合意を形成する力」、③「よりよい社会の実現を視野に国家・社会の形成に主体的に参画しようとする力」の関わりのある回答の是非を、○、△、×の指標で示した。知識の獲得に関係のあるものは①、話し合いや対話、討論等、集団としての意見形成にかかわりあるものは②、「自分の生活に関わるものか」についての意見は、③に関わるものとして分析した。

「好き」「嫌い・どちらでもない」の理由は、両者とも①、③に強く関係していることがわかる。特に「好き」と答えた学生は、知識を獲得することの意義を、「ゲームの裏設定」や「ストーリー」等、文脈に位置付けて、感じていることがわかる。逆に「嫌い・どちらでもない」の学生は、「勉強しても覚える

だけでつまらなかった」「学んだことが日常生活で役に立ったことがない」等、社会科を学ぶ意義を見出せないことがその要因であることが分かる。

しかしながら、彼らが「社会科の意義を理解していないのか」と言えば、そうではないことが、アンケートの設問2から推察できる。その結果を示したものが資料2である。

【資料2 社会科についてのアンケート（第1回講義時）②】

2. 社会科は必要か

必要だ	64
必要ない	1
どちらともいえない	5
無回答	2

【「必要だ」の理由】

- ・選挙の投票率。
- ・世界の政治・経済を学ぶことができる。
- ・有名な土地と言われてどこかわからなかったら恥ずかしい。
- ・過去に起こったことや未来の予想を見ながら自分なりの意見を考えられる。
- ・大きな夢を歴史上の人物を通して見つけれられるきっかけになるかもしれない。
- ・知っていることに損はない。
- ・社会にでていくために必要な教科。
- ・社会のしくみを理解するため。
- ・小学校のうちに知識の土台をつくっておいた方がよい。
- ・人生の楽しみ方が増えるから。
- ・時代によってどんどん新しい歴史が更新されるから。
- ・同じ過ちはくりかえさないように。
- ・社会科を学ぶことによって知識の幅や選択の幅が増えるから。

【「必要ない・どちらでもない」の理由】

- ・社会科を勉強しなくても生きていける。
- ・その後に生かすには明らかに学びが浅い。
- ・政治的意図が入るから。
- ・時代がかわれば必要性がなくなる。
- ・今まで日常生活に関わってきたものはほとんどないから。
- ・江戸時代以前の出来事を学んでも意味がない。現代社会のような最近のことで十分。

「必要だ」と考える学生は、「社会にでていくために必要な教科」「社会科を学ぶことによって知識の幅や選択の幅が増えるから」等、社会における社会科の必要性、有用性、つまり③について言及している。

その反面「必要ない・どちらでもない」は、「時代が変われば、必要性がなくなる」「その後には明らかに学びが浅い」等の意見から分かるように、社会科を学ぶ意義を見出していない。「社会科が好きではない・どちらでもない」と答えた65%（72名中47名）の学生も、おおむねこのように考えていると推察できる。それにも関わらず、全体で94%（72名中64名）の学生は「社会科は必要だ」と感じている。すなわち、彼らは将来社会に出ていくことを想定し、社会科の必要性を感じているにもかかわらず、小、中、高等学校の社会科の授業は、「将来社会に活かすことのできる知識・技能を身に付けたい」という学生のニーズに応える授業を行ってこなかったのではないのか。

教師は、教育目標に即して、教科内容を子どもの学習経験や学校・地域の実態からアレンジし、カリキュラムマネジメントを行わなければならない。しかし、以上の学生の実態から、彼らは「民主主義の担い手たる資質・能力」を身に付けることのできる、主権者教育を受けてこなかったことが推察できる。社会科教育における教育目標とそれを実現するカリキュラムマネジメントの熟慮、すなわち内容構成や方法原理の欠如が原因であると思われる。

そこで、初等社会科内容論の講義においては、内容構成、および方法原理の要となる「社会科観」―「その内容を学ぶことによどのような意義があるのか」「なぜ社会科を学ばなくてはならないのか」―の獲得を目的として、15回の講義を行った。

3. 初等社会科内容論の概要

初等社会科内容論15回の概要を示したものが表1である。各回において、学生の日常生活に関わる社会問題論争をとりあげることによって、「社会科を学ぶことがなぜ必要なのか」を考え、自分なりの「社会科観」を構築することを目指した。

【表1 2019年度初等社会科内容論の概要】

回	内 容
1	なぜ社会科を学ぶのか～トランプ政権の樹立から考える
2	社会科で身に付ける知識とはどのようなものか～消費税について考える
3	正しい判断とはどのような判断か～保護か自由か～米政策から考える
4	学習指導要領とは何か
5	小学校社会科内容編成の原理
6	第4学年①「人々の健康や生活環境を支える事業～日本の水道事業は100%公共事業のままでよいのか」
7	浄水場見学（校外学習）
8	第3学年①「身近な地域や市区町村の地理的環境～地図から見る岡山市の特徴」
9	第3学年②「地域にみられる生産や販売の仕事～生産と消費をつなぐ流通機能としての「店」の役割と意味」
10	第4学年②「地域の発展に尽くした先人～芋代官―井戸平左衛門（島根）、坂本養川（長野）」
11	第5学年①「我が国の工業生産～なぜ日本車は強いのか」
12	第5学年②「我が国と情報の関わり～もう新聞はいらないのか」
13	第6学年①「現代社会の仕組みや働きと人々の生活～人権の尊重とは～自由権と社会権、平等」
14	第6学年②「現代社会の仕組みや働きと人々の生活～『国民主権』のあるべき姿は、『間接民主制』か？『直接民主制』か」
15	まとめ～小学校社会科の意義とは何か。

第1回から5回までは、小学校社会科学習の全体像をつかむことが目標である。第1回は「トランプ政権の樹立」を通して社会科を学ぶ意義について、第2回は「社会科で身に付ける知識とはどのようなものか」について、消費税の軽減税率の問題を通して考えた。第3回は社会科における判断力について考えることを目的として、TPP問題について話し合った。第4回、5回は、学習指導要領の分析をすることで、小学校社会科の学習内容のフレームワークについて理解した。第6回から14回は、小学校のそれぞれの学年の学習内容を2つずつ取り上げ、現代社会問題と関連付けながら内容を理解していった。

各回においては、必ず論争問題を取り上げ、グループワークを行った。例えば、第15回、第6学年①「現代社会の仕組みや働きと人々の生活～人権の尊重とは～自由権と社会権、平等」では、アメリカにおけるアフアーマティヴアクションの問題を取り上げ、「平等とは何か」について議論を深めた。

以下では、特に第12回、第5学年②「我が国と情報の関わり～もう新聞はいらないのか」の講義を取り上げ、学生の変容について明らかにする。

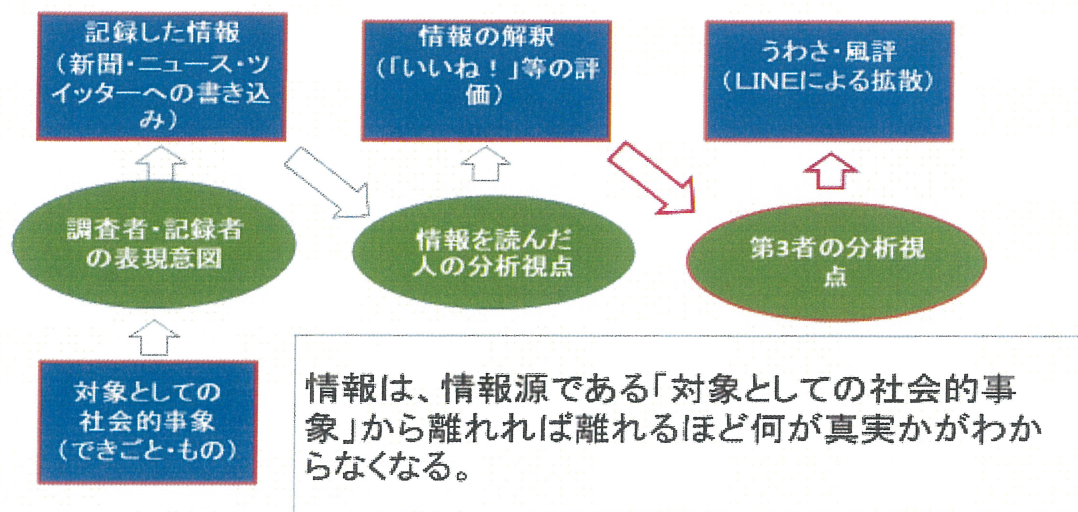
4. 第12回講義、第5学年②「我が国と情報の関わり～もう新聞はいらないのか」

全15回のそれぞれの講義において、学生は社会科観を構築していったが、その中でも、特に教育現場においても近年課題となっているSNS、ビッグデータ等の「情報」をテーマとした第12回の講義の概要を例に、学生の変容について明らかにしていく。第5学年の「我が国の産業と情報の関わり」は、「①放送、新聞などの産業は、国民生活に大きな影響を及ぼしている

ことを理解すること（いわゆるマスメディアの学習）」、「②大量の情報や情報通信技術の活用は、様々な産業を発展させ、国民生活を向上させていることを理解すること（いわゆるビッグデータの活用等の学習）」の2つの内容で構成されている。いずれの内容も、現代社会において子どもが将来直面するであろう社会問題を孕むものである。この問題を教師としてどう解釈し、どのように教材化するのか考えることは教師にとって必要不可欠である。そのため特に、情報について取り扱った第12回の講義の実際について取り上げた。

情報とは、決まった「形」はなく、いずれかの媒体に移ることで実体化し、流通するものである。例えば、ニュースはあるテーマについて構成された情報が、声や映像、文字という無形の媒体の形をとって私たちに届けられるものであり、自動車などの工業製品は、顧客のニーズに応じた設計情報を鋼板等の材料に正確に写すことで、作られる。前者は無形、後者は有形の媒体である。第5学年では、この2つの種類の情報を取り扱う。第12回の講義においては無形の情報、すなわち新聞やSNS等の情報について考える学習を行った。

そもそも、情報の信憑性とは不確かで、不安定なものである。それを示したものが図1である。対象としての社会的事象（できごと・もの）は、それをみる人や聞く人の主観によって切り取られる。それが「記録した情報」である。例えば、公園を歩くとき、公園の公共的な機能に関心のある人ならば、遊具やベンチの配置、バリアフリーの機能、そこを利用する人々について記録するであろう。



【図1 情報の変容 (著者作成)】

しかし、動植物に関心を持つ人は、公園に生える木々や花、生き物に着目するだろう。また、個々人の「記録した情報」は、決してそのままの形で読む人には伝わらない。情報を読む人もまた、自らの既存知識のフレームワークに当てはめて、情報を解釈するからである。これが「情報の解釈」である。情報の解釈には必ず、それを読む人の見方・考え方が入り込む。ツイッターやブログはその典型例であろう。その「情報の解釈」が広く一般に受け入れられたときに、情報は「うわさ」や「風評」となる。解釈者が著名人や有名人であればあるほど、情報は「うわさ」や「風評」になりやすい。つまり、情報はもともとの情報源である「対象としての社会的事象」から離れれば離れるほど、その信憑性があいまいになるのである。12回の講義の流れの概要を示したものが、表2である。

講義では、まず【新聞の発行部数の推移】の資料を示し、なぜ新聞の発行部数が減少したのか考えさせた。そもそも大学生自体も新聞を日常であまり読まなくなっている（「今日、新聞を読んだ人」と聞いたところ挙手したのはわずか受講者73名中

3名であった）。そのため、「インターネットやSNSが普及したため」と要因については、簡単に推察できた。そこで、新聞とSNSのひとつであるツイッターの特徴を学生がグループで話し合い、全体場で以下のように、結論づけた。

新聞の特徴

【新聞の取材・執筆】

- ・新聞記者の仕事は「人に話を聞いて記事を書く」こと。
- ・取材対象は多種多様。困難な取材の場合、取材相手と信頼関係をつくる誠意がなにより重要である。
- ・事実を発掘する調査報道では、ジグソーパズルを組み立てるような丹念な取材が特に必要になる。
- ・その一方、新聞に書くことで人を傷つけるおそれもあることから、他の職業に増して倫理観が求められる。

【新聞の編集・レイアウト】

- ・記者たちが集めた情報を読者に提供するように加工するのが編集の仕事。
- ・記事が過不足なく正しく書かれているかをチェックし、ニュース価値を判断して見出しをつけ、コンピューターで紙面に組んでいく。
- ・新聞社の締め切りは読者に届ける時間から逆算して決められる。

【表2 初等社会科内容論第12回「第5学年②「我が国と情報の関わり～もう新聞はいらないのか」の概要」】

発 問	授業資料	学生の獲得する知識・意見【学習形態】
1. 情報とは何だろうか。	授業資料① 「情報とは」 授業資料② 「情報の変容」	①事物・出来事に関する知らせ ②ある特定の目的について、適切な判断を下したり、行動の意志決定をするために役立つ資料（データ）や知識 ③一定の約束に基づいて人間が数字・音声などの信号に与えた意味や内容＝あるテーマについて構成された情報＋声・映像・文字（無形） ④機械系や生体系に与えられる指令や信号。たとえば遺伝情報、設計情報など＝顧客のニーズに応じた設計情報＋鋼板等の材料（有形） ⑤物事に関する知識の不確かさを減少させるもの。 【教員の説明】
2. 情報のよさとこわさとは何だろう。	授業資料③ 「情報の怖さ」	・自分の知りたいことが分かる。 ・生活に役立つ知識が得られる。 ・風評被害。 ・ネットによるいじめ。 ・デマ 【ペアワーク】
3. このような情報による被害をなくすためにメディアはどんな努力をしているのか。新聞の事例から考えよう	授業資料④ 「新聞の特徴」	・新聞の良い点は「ニュースの大きさが一目でわかること」「記者が取材した信頼性」「文字でゆっくり確認できる」「解説などくわしい内容」「切り取って手軽に保存こと」である。 ・新聞は取材・編集・発行という流れの中で情報の精選や点検が綿密になされている。 ・新聞社が情報に責任を持っている。 【グループワーク】
4. しかし近年新聞の発行部数は減少している。なぜか。	授業資料⑤ 「新聞の発行部数の推移」	・SNS等の情報の発達したため。 ・インターネットの情報の方が自分の知りたいニュースがすぐにわかる。 ・新聞は読むのが面倒。 ・新聞はお金がかかる。 【ペアワーク】
5. SNSのひとつツイッターの特徴とは何か。	授業資料⑥ 「ツイッターの特徴」	・不特定多数に向けた情報発信の可能にしたメディア ・140字の短い文章で情報を発信するメディア ・注目される情報が発信されれば何千、あるいは何万ものフォロワーを獲得し、リツイートされ、様々な回路を介して情報が拡散される。 ・「すぐに誰かに伝えたいと思ったことを投稿する」＝情報共有の同時性 ・誰もが情報の受信者であり、同時に発信者になる。膨大な量の情報が循環し続ける。その循環自体が独自の社会的リアリティを構築する→フェイクニュース。 【グループワーク】
6. アメリカの対メキシコ、北朝鮮政策についての、トランプ大統領のツイッターと新聞記事を比べよう。	授業資料⑦ 「トランプ大統領のツイッター」	（トランプ大統領のツイッター） ・簡潔で読みやすい。

発 問	授業資料	学生の獲得する知識・意見【学習形態】
<p>7. ツイッターは人々の政治的な判断にどんな影響を与えるだろうか。</p> <p>8. これから私たちはどのように情報とつきあっていけばよいか。授業の感想を書こう。</p>	<p>「アメリカのメキシコ、北朝鮮政策についての新聞記事」</p>	<p>・「嘘つきマスコミ」や「彼らは長いことアメリカを弄んできた」など過激な言葉が並ぶ。</p> <p>・トランプ大統領は有名人なので、特に彼を支持する人たちは信じやすいのではないかな。</p> <p>・マスコミや北朝鮮への悪感情を助長する。 （新聞記事）</p> <p>・事件の背景や経緯がよくわかる。</p> <p>・一方的な視点ではなく、日本、韓国、北朝鮮、アメリカなどいろいろな立場の見方がわかる。</p> <p>・難しい言葉についても、別枠で説明が書かれている。</p> <p>・公正な判断がしやすい。</p> <p style="text-align: right;">【グループワーク】</p> <p>・一方的な見方考え方で判断をする。</p> <p>・人々の憎悪を掻き立てて戦争が起こりやすくなる。</p> <p>・対立が生じやすくなる。</p> <p style="text-align: right;">【個人思考⇒発表】</p> <p>※ミニレポートに書く。（後日提出）</p>

・大きなニュースが飛び込んでくれば、記事を差し替えてより新しい情報を読者へ届ける。編集作業は常に時間との戦い。

ツイッターの特徴

- ・不特定多数に向けた情報発信を可能にしたメディア
- ・140字の短い文章で情報を発信するメディア
- ・注目される情報が発信されれば何千、あるいは何万ものフォロワーを獲得し、リツイートされ、様々な回路を介して情報が拡散される。
- ・「すぐに誰かに伝えたいと思ったことを投稿する」＝情報共有の同時性
- ・誰もが情報の受信者であり、同時に発信者になる。膨大な量の情報が循環し続ける。その循環自体が独自の社会的リアリティを構築する→フェイクニュース
- ・世界中で大きな議論を呼んでいる虚偽の報道、「フェイクニュース」。日本でもネット上に溢れるウソの情報がSNSなどを通じて拡散され、混乱を招いている。

これらの比較から、それぞれのメディアの特徴が明らかになった。新聞は情報の収集、吟味、精選に非常に時間を割いている。しかしその分、情報の発信に時間がかかるので、情報が伝わるまでのタイムラグが生じる。一方、ツイッターは不特定多数が発信できるメディアであるので、情報をいち早く伝えることができる。しかし、情報の真偽や影響が吟味されることなく、流されるので「フェイクニュース」などの、社会的混乱を招くことがある。

実際に「北朝鮮のミサイル問題」「メキシコ国境問題」についての、トランプ大統領のツイッターと新聞記事を読み比べ、ツイッターと新聞の情報は、社会にどのような影響を与えるのか、グループで話し合った。主な意見は以下の通りである。

【トランプ大統領のツイッターについて】

- ・簡潔で読みやすい。
- ・「嘘つきマスコミ」や「彼らは長いことアメリカを弄んできた」など過激な言葉が並ぶ。
- ・トランプ大統領は有名人なので、特に彼を支持する人たちは信じやすいのではないか。
- ・マスコミや北朝鮮への悪感情を助長する。

【新聞記事について】

- ・事件の背景や経緯がよくわかる。
- ・一方的な視点ではなく、日本、韓国、北朝鮮、アメリカなどいろいろな立場の見方がわかる。
- ・難しい言葉についても、別枠で説明が書かれている。
- ・公正な判断がしやすい。

これらの分析から、新聞が読まれなくなり、ツイッターがメディアの主流となった場合、人々はどのような政治的判断をするようになるかは容易に想像できる。「一方的な見方・考え方を押し付けるようになる」「戦争が起きる」等、その影響力を学生は実感することができた。以下は講義後の学生の感想である。

（学生A）

SNSが普及する現在、私は新聞は必要だと考える。確かにSNSは大量の情報をいつでも、どこでも、手軽に得ることができ、とても便利なものだ。しかしそのSNSの普及により、若者の活字離れが顕著に表れていることも事実だ。若者の活字離れは読解力の低下につながっている。またSNSにはその記事を書いた人の偏見も多く入っていることがあり、自分で考え思考する力がつかない。情報量も多く、何が正しいのか判断する必要もある。一方で新聞は記事ごとで詳細にまとめられており、その分知識を得られる。SNSのような表面だけの情報ではなく、全体を知ることができるのだ。よって私は情報を得るひとつの媒体として新聞は必要であると思う。

（学生B）

私は新聞は必要であると思う。確かに現在SNSの普及によってスマートフォンなどで

誰でも手軽に自分の知りたい情報を速く得ることができるようになり、便利な面が大きい。私もよく情報を得るのはSNSからである。しかし、SNSでの情報には悪い面もある。そしてその悪い面が、私たちの生活に大変大きな影響を及ぼすだけでなく、偏った見方・考え方をしてしまうことにもつながると考える。例えば今回の講義でトランプ大統領のツイッターを例に挙げて新聞との比較をした。その時ツイッターなどのSNSは手軽に誰もが情報を発信できるため、発信者中心の偏った情報を第三者は正しいと捉えてしまうことが多いと感じた。SNSに書かれた情報をうのみにしてしまうのは危険である。一方新聞は「人に聞いて記事を書く」という形で丹念に情報の収集を行っているため、より事実に近い情報が提供されている。（中略）自分でどの情報が正しいのか判断する力を身に付けるためにも客観的に物事をみることができると新聞は必要である。

（学生C）

新聞をみれば、自分が関心のない出来事も否応なく視界に入ってきます。それによって新たな興味がわき、人としての幅も広がると思います。それに対しSNSは、自分が興味関心のある情報だけに限られてしまします。そして最近自分が見たページ、検索から「あなたにおすすめの情報」というものがあります。確かに便利な機能ですが、SNS自体がカスタマイズされて、自分のオリジナルのSNSができあがってしまい、自分の意図しないうちに情報が限定されてしまっています。

（中略）新聞、SNS両者にそれぞれメリット、デメリットが多くあります。状況次第でどちらが使いやすいかは変わりますが、上にあげたように新聞にしかできないこともあり、新聞は必要だと思います。

このように学生は、情報が社会に与える影響について、「新聞」と「ツイッター」を比較することで実感し、情報の重要性について再認識することができた。このような認識を獲得できてこそ、小学校第5学年の「我が国の産業と情報の関わり」において、「なぜ小学校において情報の教育をしなくてはならないのか」、市民的資質の育

成を目標に据えつつ、単元構成を行うことができると思う。

5. 「初等社会科内容論」講義後のアンケートの考察

「初等社会科内容論」の講義では、前述したように、現代社会問題を題材とし、その問題解決についてグループで話し合う学習活動を行ってきた。その結果「社会科」に対する学生の認識に変容がみられた。

資料3は、15回の講義後に行ったアンケート結果である。第1回目のアンケートと同じ項目である。最初の結果に比べ、「好き」が増え、「嫌い」が減った。「どちらでもない」の一部が「好き」へ、「嫌い」が「どちらでもない」に移動したと思われる。しかし、問題は数ではなく、「好き」あるいは「どちらでもない」と考える理由である。主権者として求められる資質能力、①「多面的・多角的に考察し、公正に判断する力」、②「課題の解決に向けて、協働的に追究し根拠を持って主張するなどして合意を形成する力」、③「よりよい社会の実現を視野に国家・社会の形成に主体的に参画しようとする力」の関わりのある回答の是非を、○、△、×の指標で示したところ、第1回目のアンケート結果と、違いがみられた。明らかに変容が見られたのは③の項目である。「テレビやニュースで言っていることが理解できる」「役に立つのが実感できる」と、日常生活での有用性に言及する意見が増えた。また第1回目のアンケートでは見られなかった②に関わる意見についても、「さまざまな意見を知ることで見方・考え方が広がる」「自分の知らないことを周りの人と共有して自分の考えを持つことができるから」等、対話の重要性を実感する意見があらわれた。また、社会科に対する考え方の変化に応じ

て、その意義についても変化がみられた。資料4は「社会科は必要か」の問いに対する結果である。全員が「必要である」と回答した。その理由も、はじめのアンケート結果と比べてより具体的なものとなっている。特に、「社会科がなかったら知識が薄くなって知識のない人が政治をする時代が来る」「これからの社会がどう動くか、またどうすればよい方向になるかなどを考えるよいきっかけになるから」等の意見は、社会科の目標である市民的資質の育成に関わるものである。以上の結果から、「社会科」についての学生の意識の変容を以下のようにまとめることができる。

- 社会科に対する興味関心の向上
- 社会科に対する必要感の向上
- 「社会科が好き」な理由と「社会科が必要である」と考える理由が連関して（つながって）いる。

【資料4 社会科についてのアンケート（第15回講義後）②】

2. 社会科は必要か

必要だ	68
必要ない	0
どちらともいえない	0

【「必要」の理由】

- 物事の見方・考え方を知るための唯一無二の教科だと思うから
- 自分の知らないことについては初めは全然興味・関心がもてなかったが、社会科でその知らなかったことを考えることで、新たな見方・考え方・関心が生まれ自分の視野が広げられるから。
- 物事を多角的な視野に立って考えられるようになるから。
- 社会科がなかったら知識が薄くなって知識のない人が政治をする時代が来る。
- これからの社会がどう動くか、またどうすればよい方向になるかなどを考えるよいきっかけになるから。

【資料3 社会科についてのアンケート（第15回講義後）①】

○実施：2019年7月18日（水）

○アンケート対象者：初等教育学科1年生

○アンケート回答者：68名（男50名，女18名）

○有効回答：68名

1. 社会科は好きか嫌いかな。

好き	嫌い	どちらでもない
36名	1名	31名

2. 「好き」（1～11） 「嫌い・どちらでもない」（12～15）の理由の分析

「好き」「嫌い・どちらでもない」の理由	①「多面的・多角的に考察し、公正に判断する力」	②「合意を形成する力」	③「国家・社会の形成に主体的に参画しようとする力」
1. 今の日本や世界のことを学んで自分の考えを持ちいろいろな人と交流してさまざまな意見を知ることで見方・考え方が広がるから。	○	△	×
2. 新しい知識を知れることは楽しいから。	△	×	×
3. 自分の知らないことを周りの人と共有して自分の考えを持つことができるから。	△	△	×
4. 自分に関わる世の中のことについて知れて、テレビやニュースで言っていることが理解できるのはうれしいから。	○	×	△
5. 今までの講義を通してSNSのことや車のことなどさまざまな方向から知識を得ることができて関心が生まれたから。	○	×	△
6. 社会科を学ぶと今の社会の状況もわかることができるから。	△	×	○
7. 自分で調べて新しい知識になっていくのが面白いと感じるから	△	×	△
8. 1つだけと思っていたことがいろいろな考え方があり一人一人考え方が違うから身近なことへとつなげて考えることで興味関心がわくから	○	△	△
9. 他の人の意見と自分の意見を共有し、客観的視点からも考えることができ考えを発展させることができるから。	○	○	×
10. 社会科はさまざまなことが関連していてひとつのことにとどまらず多くのことに関心がもてるから。	○	×	△
11. 様々な視点から社会が見えるようになる。	○	×	△
12. 分野によってわかれる。政・経倫理は好きです。役に立つのが実感できる。	×	×	○
13. 言葉や文を学ぶだけの社会科は好きではない。小中高そうだった。しかしこの内容論の授業でこういう進め方で学んでみるととても楽しく感じている。	×	○	△
14. いろんな観点から見る力が身に付くしいろんな世界の出来事を知れることがいいですが、好きにはなれなかったけどきらいではなくなった。	○	×	△
15. 自分のためにはなっていると感じているため	×	×	△

なぜ、15回の講義を通して、学生の社会科に対する意識は変わったのか。以下は講義後の学生の感想を抜粋したものである。それぞれ後に叙述する第1～第3の社会観の変容の要因を代表する意見である。

【学生D】

（前略）高校までの社会は暗記がメインでした。なので正直おもしろくなかったです。しかし教職を目指す者の一人として授業を受けてみると、議論をするのがとても楽しいと感じました。自分の意見を他者と交流するからという理由です。そのときに「こんな考えもあるんだ！」という新しい発見があります。（中略）自分が教師として子どもたちの前に立った時は、「やらされ勉強」ではなく、積極的に交流をはかる授業をつくりたいと思います。

【学生E】

（前略）高校の頃のようにただ先生の話聞いてひたすら暗記になってしまうような感じではなく、自分の意見をもちつつ他者とも交流して、物事を多角的に捉えるようになりました。（中略）国内の内容から国外まで様々なところに視点を向け、90分間で深く濃く有意義な時間を過ごせました。

【学生F】

（前略）最初の頃、この教科の名前をみて「また社会を習うのかあ」と思っていた。しかし、講義を受けてみると全く違うような感じがした。ある問題について答えを示すだけでなく、他の人の考えや別の角度からの見方などこの講義でいろいろな見方があるのが分かった。

【学生G】

私が社会科内容論を受講して感じたこと

は、今自分が当たり前のように行っていることが実はとてもすごいこと、そしてたくさんの方の努力や苦勞によってできているということです。（中略）また政治や世の中の様々な出来事に関心を持ち、その知識を得ることの大切さも学びました。特に政治について関心を持つことはとても重要だと思いました。政治についての関心がないと投票に行かない→投票しないので自分の意見が反映されない→ますます政治に関心がなくなるといいう悪いサイクルになってしまうため、時代に置き去りにされてしまう可能性があると感じました。

第1の理由は、「議論する社会科」の実践に挑むと考えられる。『やらされ勉強』ではなく、積極的に交流をはかる授業（学生Dの感想から）を行うことで、主体的な学習の楽しさを実感する学生が増えた。

第2は「多面的多角的な見方・考え方を保障する内容」を講義に取り入れた点であろう。学生E「国内の内容から国外まで様々なところに視点を向け」、学生F「ある問題について答えを示すだけでなく、他の人の考えや別の角度からの見方などこの講義でいろいろな見方があるのが分かった」等の意見からもわかるように、講義ではひとつの答えを教えるのではなく、あえて対立する様々な見解を示すことで、自らの考えを構築できるようにした。これが「やらされ勉強」にならなかった1つの要因であると考えられる。

第3は「身近な社会的事象につなげる授業」の工夫であろう。学生Gの意見「政治についての関心がないと投票に行かない→投票しないので自分の意見が反映されない→ますます政治に関心がなくなるといいう悪いサイクルになってしまうため、時代に置き去りにされてしまう可能性があると感じました」のように、初等社会科内容論で学

んでいることが自分たちの生活に直結していることを理解することができた。

このように、初等社会科の内容をもとに、現代社会問題学習を取り入れたことは、将来教員を目指す学生 of 社会科観を育成する上で有効であることが明らかになった。

6. 本研究の成果と課題

本実践では、教師が公的カリキュラムや地域、学校、児童の実態、諸学問の成果を調整し、主体的なカリキュラムマネジメント、すなわちゲートキーピングを行うには、教育系大学、学部において個々人の「教科観（社会科においては社会科観）」を育成することが必要であるという認識に立ち、「理論する社会科」「多面的多角的な見方・考え方を保障する内容」「身近な社会的事象につなげる授業」という「社会科観」を育成する授業の内容・方法について明らかにした。全15回の講義の結果、学生は「社会科がなぜ必要か」「社会科の意義とは何か」について理解し、自分なりの「社会科観」を育成できたと考える。

小学校の教員は基本的に全教科の科目を担当する。社会科だけでなく、それぞれの教科の「教科観」を育成することが、教員養成課程には求められている。「教科横断的な学習」がますます推進される新学習指導要領下において、「社会科観」の構築がその他の教科の「教科観」の形成にどのような影響を与えるのか、またどのように影響し合うのかについて明らかにし、教員養成系大学、学部における教科横断的なカリキュラムの在り方について検討することが今後の課題である。

【引用文献】

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」2016年、p. 50.
- 2) 中央教育審議会、前掲書、p. 52.
- 3) スティーブン・J・ソートン『教師のゲートキーピング—主体的な学習者を生む社会科カリキュラムに向けて—』春風社、2012年、p. 30.
- 4) 草原和博、岡田了祐、渡邊 巧、大坂 遊、能見 一修、横山千夏、若原崇史、寺島 崇「社会科教員はどのようなカリキュラムデザインが可能か（2）—公民科学習材の開発と活用的事例研究」学校教育実践学研究 21、2015年、pp. 86—96.
- 5) 渡部竜也「カリキュラム・授業理論と教師教育論の連続的探求の必要性—教科内容専門領域改革に向けた研究方法への提言：社会科を事例として—」日本社会科教育学会『社会科教育研究』No. 110、2010年、p. 69.
- 6) 草原和博、岡田了祐、渡邊 巧、大坂 遊、能見 一修、横山千夏、若原崇史、寺島 崇、前掲書、p. 86.
- 7) 中央教育審議会、前掲書、p. 62.

【参考文献】

- 1) デイビット・ライアン/田畑暁生訳『監視文化の誕生—社会に監視される時代からひとびとが進んで監視する時代へ』青土社、2019年.
- 2) 伊藤 守『情動の社会学—ポストメディアの時代における“ミクロ知覚”の探求』青土社、2017年.
- 3) ジョナサン・ウルフ/大澤 津・原田健二朗訳『「正しい政策」がないならどうすべきか』勁草書房、2016年.